

## 毒をもつ動物 アズマヒキガエルとヤマカガシ

長谷川 裕子

天覧山・多峯主山では、コアジサイが咲き始め、だんだんと初夏の装いとなってきました。湿地周辺の地面には、何やら黒くて小さい生きものがたくさんいます。これはアズマヒキガエルの子ガエル(幼体)です(写真 1)。大きさは 1cm くらいしかありません。春に生まれたオタマジャクシが親ガエルと同じ姿に変化し、一斉に上陸し始めたのです。今回は、毒をもつ動物としてアズマヒキガエルとヤマカガシを紹介します。



写真 1 アズマヒキガエルの子ガエル

アズマヒキガエルは、在来種のカエルの中で、最も大きなカエルです(写真 2)。成長すると、大きさ 15cm になるものもあります。山地から平野まで広く分布し、おもに林床(森林の地表面)に生息しています。ヒキガエルの仲間には、耳腺(じせん)という目の後ろに膨らみがあります。この耳腺や体にあるイボ状の突起から、白色の毒(ブフォトキシン)を分泌し、この毒が口などの粘膜に入ると、しみたり、炎症を起こしたりすることがあります。そのため、山道で出会っても素手で触らないように注意しましょう。

この毒を蓄積して利用する毒ヘビがヤマカガシです(写真 3)。ヤマカガシはカエルを好んで食べ、大型のヒキガエルを丸呑みにすることもあります。首の近くに毒腺があり、ここにヒキガエルの毒を貯めておくのです。衝撃を与えられると、毒液が飛び散ります。また、口内の奥には毒を出す牙があるので、深く咬まれると危険です。ふだんは大人しく、出会ってもすぐに逃げてしまいますので、見つけた場合は怖がらせないようにしましょう。



写真 2 アズマヒキガエル

今回ご紹介した 2 種は、どちらも『埼玉県レッドデータブック動物編 2018(第 4 版)』に掲載されている希少な動物です。アズマヒキガエルをはじめとするカエルの仲間は、水辺と陸地を行き来するため、環境変化の影響を受けやすく、県内で確認されているほとんどの種が絶滅の危機に瀕しています。ヤマカガシなどのヘビも、カエルを捕食するため、同様に影響を受けてしまいます。つまり、カエルやヘビが生息している場所は、それだけ多様な環境が残されているということを示しているのです。

アズマヒキガエルもヤマカガシも、天覧山・多峯主山にすむ大切な仲間たちです。これからの季節、散策したら出会うかもしれませんが、毒をもつ動物だからといって、むやみに怖がったり、敵視したりするのではなく、適切な距離を保ち、安全に散策するように心がけましょう。



写真 3 ヤマカガシ